

私にも
言わせて!
第142回

行政という分野で
専門性を育んでいきたい

卒業年次でいうと、中堅に足を踏み入れる学年ではありますが、行政の仕事に就いて4年目、佐賀県に入職してまだ1年に満たない若手の年次ですので、筆を執らせていただこうと思います。どなたかの参考になれば幸いです。

協力して診断する
病理に引かれて

学生時代の志望診療科と実際に医師になって選んだ診療科が一致している人はどれくらいいるでしょうか。私は学生時代、座学で勉強している中で、心臓や腎臓といった循環器系をとっても美しいと感じて、将来は内科系で心臓か腎臓を専門にしようかと考えていました。しかし、高学年で実習が始まり、手技にほぼ魅力を感じなかったため、将来はなんでも内科的なイメージでなくなく内科系に進もうと考えていました。臨床研修医になり各科

山口県で初めての
業務に携わる

山口県ではまず周南健康福祉センター(周南環境保健所)に配属されました。当初はCOVID-19対応が業務の大半を占めていましたので臨床と同じような感覚で時間が過ぎ去っていきました。検体採取や疫学調査、行政検査の範囲や隔離期間など、手探りで進めていくのは大変でしたが、面白くもありました。またやりたいとは思いませんでしたが、保健所や行政がダイナミックに動く時に関われたことは、非常に貴重だったと思います。

最初は主にCOVID-19と感染症を担当していましたが、波と波の間や対応の段階が変わるにつれて感染症のみならず広く対人業務に携わらせていただきました。当時の保健師、薬剤師、獣医師、臨床検査技師、行政職など職場の皆さまには今でも大変感謝しており、本文を執筆しながら非常に懐かしい気持ちでいっぱいになりました。保健所業務のみならず、公衆衛生医師確保のため、他保健所の所長の方々と公衆衛生医師プロモーションム

をローテーションしたところ、絶対にやりたい診療科はなく、どの科も魅力的である一方で、決め手に欠けると感じていました。それ故に、

地元の沖縄県に帰るのか、山口県に残るのかも決められずにいました。そんな中、ふとしたきっかけで病理医が山口県で大変不足しているということ、そして全臓器を対象に「診断」という点では各科の専門医に匹敵する知識を持ち、各科と協力して診断を付けていくという点に引かれ、病理の専攻医になりました。指導医が他科の医師と行う専門医同士のディスカッションの面白さ、そして何より病理診断に対して敬

びーを作ったり、県の医師会での講演会に参加したり、たくさん楽しい仕事にも関わりました。書き出すと本当にさまざまな業務、活動をさまざまな人とさせていただいたなあと感慨深いです。多くの人と関わりながら働くのが楽しいと実感できる日々でもありました。

その後、山口県は出身大学のお膝元であり、職場環境にも恵まれていましたが、家族の仕事の都合で転居することになり、山口県を退職しました。行政から行政への転職は、そもそも募集しているかどうか、採用の時期に間に合うか、どこか自治体にアプローチするかなど、とてもドキドキしました。全国的に(公衆衛生)医師不足ではあります。分野と居住地が限定された中での転職活動でしたので、不安もありましたが、運よく佐賀県に入職することができました。

佐賀県で行政経験を
積みながら

佐賀県では最初に健康福祉政策課と医務課医療人材政策室の兼務となり、各種医療計画の改定や県の医師確保事業に携わりました。

意を向けられている姿に憧れを抱いたことも病理を選んだ大きな理由だったと思います。

家庭と仕事との両立を考え
転職を決意

専攻医となった後は、病理診断のみならず大学院での研究や学部生への教育にも多く携わらせていただき、大変勉強になりました。結婚した。そのような日々の中で、結婚し、子どもを授かりましたが、そのままの業務量に加えて子育てをこなせるほどの余裕と能力が私にはまだありませんでした。妊娠中も体調が不安定で職場に大変迷惑を掛け、その頃から転職を視野に入れて今後のことを考え始めました。そして、非常に残念でしたが、出産を機に病理も大学院も辞める選択をしました。

転職について考え始めると、必然

生まれ育った沖縄県とも、医師として育ててくれた山口県とも違う地域性に富む健康課題や、地域における医療の課題を短い期間でも垣間見ることができ、医療計画の改定の時期にちょうど県庁で勤務できたことは良い経験でした。医務課の医療人材対策室では医師多数県に分類される佐賀県が直面している医師不足や、若手医師のリクルート、研修医の定着などさまざまな課題があることが分かりました。全国的に医師不足が叫ばれる中、数や診療科の偏在でその医師不足の内容が地域ごとに若干異なる、それ故に地域枠や自治医大の取り扱いや、各種政策などに差異が生まれています。まだ数年の行政経験の中でも「県の仕事をしたい」という意識を強く感じました。県庁勤務は7か月と短い期間ではありましたが、ぎゅっと濃縮された貴重な時間でした。

今年度も県庁での兼務は継続していますが、主務は鳥栖保健福祉事務所となり、久しぶりの保健所勤務となりました。まだ右も左も分からない状況ですが、他の保健監の先生方や保健所職員の皆さまに



佐賀県鳥栖保健福祉事務所
主幹(保健監心得) 兼
健康福祉政策課主幹 兼
医務課医療人材政策室主幹
本田 成美

平成27年山口大学卒業、済生会下関総合病院での初期研修を経て、後期研修は病理診断科を専攻。令和3年山口県周南健康福祉センターに入職、5年佐賀県に入職、6年より現職。

的に検索魔になりました。できるだけ広く人と協力しながら働くことができ、小さい子どもを育てながらフルタイム勤務を続けられ、医師という特殊性を役立てることができた。仕事はないかと調べました。医師転職サイトもたくさん見ましたが、紹介される仕事や職場でピンとくるものはありませんでした。そこに、ふとヒットしたのが公衆衛生を専門とする行政医師の募集でした。もともと臨床からは一歩引いた診療科でしたので、さまざまな医師と連携する仕事から、さまざまな職種と連携する仕事に移るのも面白いのではないかと思います。その後、こうして東京に行つて「公衆衛生 若手医師・医学生サマーセミナー」(PHSS)に参加したり、山口県の担当者にお話を伺つたりして、行政への転職を決めました。

助けていただきながら、少しずつできることを増やしています。

おわりに

私は、先に述べた通り、いまだに飛び抜けて好きな分野はありませんが、同時に嫌いな分野もありません。行政に入つてからも、携わる仕事全般を面白く感じています。今後は保健所業務や県庁での仕事を続けながら、自分の得意なことや、ここ佐賀県が必要とされているものは何かを考えながら、時間をかけて専門分野を育てていきたいと考えています。

この場を借りて、最初に行政医師として私を受け入れ、育ててくれた山口県の方々に感謝をお伝えしたいと思っています。公衆衛生という分野、そして行政医師という職業を面白いと思うきっかけを与えてくれたこと、最初に山口県で働けたことはとても幸せでした。

いろいろな人との出会いを重ねながら、これからも自身の置かれた場で精いっぱい力を尽くしていこうと思いますので、どうぞ温かい目で見守ってくださいと幸いです。